

「重なり志向」の日本文化

石井隆之

0. はじめに

日本文化の特徴を一般化する試みは、これまでいろいろとなされてきた。例えば、韓国の学者によって、「縮み志向」や「切り志向」が論じられたこともある。¹

また、一般論として、日本文化は「間の文化」であるとか、「手の文化」であるとか、言われている。²

更に、日本の伝統文化は、左重視の傾向があることも間違いない事実であろう。陰陽の発想が大きく影響を与えているという考えも存在する。³

以上の例は、日本文化を一般化するキーワードの例としては、ほんの一部であるが、日本文化の特徴を概観できるということに関し、それなりの理由を提示できるものであろう。

本稿は、全く別の角度から、日本文化の特徴を一般化できるキーコンセプトとして、新たな提案をすることを目的とする。具体的には、「日本文化は『重なり志向』である」ということを、具体例を挙げつつ論じ、その『重なり』というコンセプトの説明力を証明し、何故『重なり』が重視されるのかという点にも触れることを目指す。

本稿で述べる『重なり』とは、「重なる」ということから連想可能な全ての事象を指すのであるが、日本文化が『重なり志向』である可能性を示唆している2つの事象を挙げておこう。

(1) a. 神社での拍手

b. お正月の鏡餅

(1a)に関し、神社では通常2回拍手をするのであるが、これは、拍手という「音」の重なりを意味する。(1b)では、言うまでもなく、お餅という「物」の重なりの事例である。⁴

第1章では、『重なり』という現象が、日本文化の諸側面に見られることを概観し、第2章では、『重なり』という現象から派生した概念を用いると、更に、日本文化を説明できる点を示し、第3章では、『重なり』の抽象化の極致と言える日本文化の重層性を、3つの視点から述べる。第4章で、『重なり』を重視する理由に触れつつ、全体をまとめることにする。

1. 日本文化の諸相と「重なり」

日本文化の色々な側面に「重なり」が見られる。この章では、様々な側面に見られる重なり現象を考察し、日本文化は「重なり志向」であると結論付けることが可能であるということを実証する。

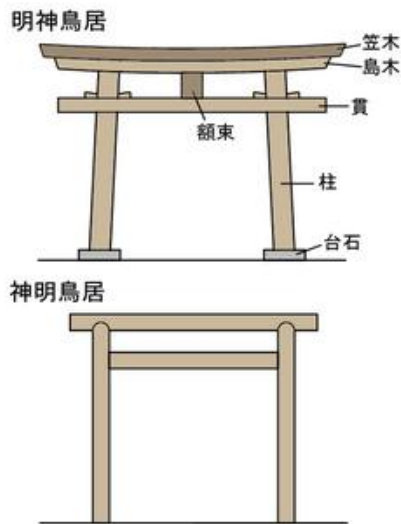
1-1 日本の建築と「重なり」

日本の建築には、いろいろな重なり現象が見られる。建築物の屋根に瓦が重ねられているが、これは、日本に限らず世界中いたるところで見受けられる。この節では、日本文化に限られる建築上の重なりを概観することにする。

1-1-1 鳥居

まず、鳥居の存在が挙げられる。2本の柱で門を作ること自体は、「重なり」を象徴することはないが、明神鳥居を例にとれば、2層の水平材とし、上層の笠木(かさぎ)に接して島木(しまぎ)を渡す点、さらに、その下に貫(ぬき)を入れて柱を固定する形式が、正に鳥居が「重なり」を代表する門であることが分かる。

(2) 鳥居の構造



鳥居の形状だけでなく、機能も重なりと関係がある。鳥居は、俗なる世界と聖なる世界の重なる地点において、その二世界を分けている。

なお、鳥居は1基、2基と数えるが、「基」は、基本的なものの上に何かが乗っかることを暗示し、重なりをイメージできる。

1-1-2 五重塔

先に見た鳥居が、神社建築において、重なりを代表する建造物であるとする、仏教建築におけるそれは、間違いなく五重塔である。五重塔は、元来ストウーパと言われ、仏教の開祖、釈尊の遺骨を奉安するためのものであったが、建築美が完成したのは、この日本においてである。

重なりは、塔の五重の部分だけでなく、塔の上に添えられている相輪(そうりん)にも見られる。特に、宝輪は9つの輪が重なっている。⁵ (資料1参照)

更に、奈良市の東大寺は元来、七重塔が2基そびえていたし、奈良県桜井市の多武峰(と

うのみね)にある談山神社に至っては、十三重塔が存在している。重なりが重要であることを示しているかのようである。

なお、日本本来の木造建築における構造部分には、釘を一切使わない「仕口(しぐち)工法」で、柱と梁を固定している。五重塔も基本的にはこの工法で建てられている。この釘を使わないということは、直接木と木を重ねることになり、「重なり」が強調されていると言える。

更に、五重塔も、1基・2基と数える点も付記しておく。

1-1-3 城郭建築

日本の城郭における天守閣や多重櫓(やぐら)は、複雑に屋根が重なっていることが多い。屋根の重ね方が日本独自で、通例、屋根の層と階が一致しない。いずれにしても、建物が重層的であることが分かる。

また、天守閣の周りに曲輪(くるわ)という区画があるが、非常に複雑な構造である。つまり、本丸の周りに二の丸、三の丸などの曲輪が存在し、敵が城郭内に侵入した場合でも、すぐには攻められない構造となっている。つまり、この曲輪も重層的になっているわけである。

1-2 日本の庭園と「重なり」

庭園は、「庭」と「園」を重ね合わせた合成語であるが、「庭」と「園」は微妙に意味が異なる。昔は、何かを行うための平らなところを「庭」、野菜や果物を育てるところを「園」と言って区別した。園には草花が生い茂るので、多くの植物が重なり合うこともある。しかし、それは世界中の庭園に言えることなので、この節では、日本文化における庭園と「重なり志向」の関係に限定する。

1-2-1 枯山水

石と砂でできた枯山水庭園では、石の周りの砂紋(さもん)が特徴的であるが、この砂紋自体が、波の重なりを表している。

枯山水庭園が世界的に有名な竜安寺(京都市右京区にある臨済宗妙心寺派の寺)において、その庭園の石の数は、15個あるのに、どこから鑑賞しても最大で14個までしか見えない。これは、ある石に別の石が重なるように設計されているということになる。⁶

1-2-2 借景

日本の作庭技術の1つに、借景を利用するというものがある。つまり、庭とその外側の景色を重ねるのである。正に、「重なり」志向の具現と言える。

京都市左京区にある、竜安寺と同じ臨済宗妙心寺派の円通寺には、国指定名勝の円通寺

庭園が存在するが、この庭園は、比叡山を借景としていることで有名である。

1-3 日本の芸術と「重なり」

絵の具を重ね合わせてできる油絵は西洋的である。この節では、日本の芸術と日本独自の重なり志向の関係を見る。

1-3-1 漆器

日本の芸術作品を代表するものとして、漆器がある。漆器は、木や紙などに漆を塗り重ねて作る工芸品であるが、これは正に重なり志向の工芸品と言える。漆器は、英語で japan というので、日本を代表する工芸品であることが分かる。⁷

1-3-2 寄木造

幾つかの木を重ね合わせて1つの仏像を作る技術が寄木造であるが、これは、彫刻の世界での重なり志向であると言える。

平安後期の仏師、定朝(じょうちょう)は、この寄木造の完成者と言われているが、代表作に宇治の平等院本尊の木造阿弥陀如来坐像(国宝)がある。なお、平等院は、西方浄土とこの世の重なりの位置に存在すると言える。

1-4 日本の衣食住と「重なり」

西洋の洋服は、それに体を入れるイメージがあるのに対し、日本の着物は、体に巻くことが基本の衣服と言えるであろう。体に重ねているイメージを持つのは、着物のほうであるが、着物が衣服界の「重なり志向」の代表格と言うにはやや説得力に欠ける。この節では、もっと重なり志向が明確に表れた事象を、衣食住の視点から考察する。

1-4-1 十二単

10世紀ごろから始まった平安貴族の正装である十二単は、衣生活における「重なり志向」の極致と言えよう。十二単は重さにして20kgほどあり、春用・夏用・秋用・冬用があった。

十二単を構成する着物の1つである「袷」(うちぎ)を、裾や袖を少しずつずらして重ねることを「襲」(かさね)と言うが、こうすることで、正に、重なっていることが目に見えるのである。

ところで、裏地のある和服のことを「袷」(あわせ)と呼ぶが、この袷の表地と裏地で色を違わせることを「重ね」(かさね)と言う。十二単では、このような表地と裏地の色の重なりにも心遣いが見られる。

1-4-2 重箱

食生活において「重なり志向」を表すものとして、すぐに頭に浮かぶのは、重箱である。「重」という字が如実にそのことを語っている。

種類としては、2重から5重までであるが、四季を表す4重が基本的な重箱である。上から4段目は「しのじゅう」というと、「死」を連想するので、「与(よ)の重」と呼ぶ。お正月料理の重箱で、各段に何を詰めるとよいかを示しておく。5段目を添えたものが、正式の重箱と言われることが多い。

- (3) a. 一の重：祝肴⁸
- b. 二の重：酢の物、口取り
- c. 三の重：焼き物
- d. 与の重：煮物
- e. 五の重：控え重なので、何も詰めない

重箱は、「めでたさを重ねる」という意味を込めて、正月に用いられる。重箱自体が重なっているのであるが、これにめでたさの重なりという意味を持たせるので、正に、重箱は食生活における「重なり志向」の極致と言ってもよいだろう。

なお、俗に料理の「さしすせそ」という言葉があるが、これは、調理をする際、砂糖・塩・酢・醤油・味噌の順に調味料を重ねてゆくという法則を一言で述べたものである。この言葉は、日本料理における「調味料の重なり志向」を一言で表すものとして、重要である。

1-4-3 箸

箸は日本の食生活に欠かせないもので、日本以外には韓国・中国・ベトナムなどで使用されるが、箸を主とするのは日本文化であるということは、揺ぎない事実である。

箸の起源ははっきりしないが、『古事記』のスサノオノミコトの神話にも見えるほど古い。古代の箸は、竹を2つに折った形であったが、物を食するとき端で挟むのは、古今変わらない。端を合わせるから、「箸」となったという民間語源もあるが、2つの箸を重ねるようにして物を挟むのが、箸の基本機能であるから、箸は「重なり志向」の食器であると言えるであろう。

西洋文化のフォークは「突き志向」、スプーンは「掬い志向」、ナイフは「切り志向」と言えるであろうが、西洋には「重なり志向」の食器は見当たらない。

1-4-4 縁側と床の間

縁側は、住居の母屋と庭の重なり部分に存在するという点で、日本の家屋における重なり志向の具現であると言える。日本文化では、一般的に、「AとBの峻別を避け、AとBの中間領域を持つ」ということが言えるが、これは正に、重なり志向の発想である。

また、床の間は、日本家屋において、最も神聖で重要な場所であると言えるが、この場

所は、俗なる空間(=居間)と聖なる空間(=仏の世界)との重なり部分であると言ってよい。

なお、玄関という言葉は、語源的には、「玄妙なる関門」という意味を持ち、外界と家の中の重なり部分に存在すると捉えることができる。

更に、正月には、家屋の入り口を注連(しめ)飾りで飾りつけるが、この注連飾りは、神社における鳥居とほぼ同じ機能を持ち、家の中が神聖であることを示す。それゆえ、注連飾りは、俗なる空間と聖なる空間が重なる位置に存在していることになる。

1-5 日本の日常生活と「重なり」

日常生活で不可欠となってきた携帯電話は、たいてい機能がいろいろと重なっている。この重なり志向は、日本特有ではなく、世界に共通している。この節では、日常生活において、日本的な重なり志向を論じる。

1-5-1 重日

日本文化では、月の数と日付の数が一致する日のうち、陽なる数が重なる日を重日(ちょうじつ)と言って、祝い事に適した重要な日とみなしてきた。

- (4) a. 1月1日 元旦(国民の祝日)
- b. 3月3日 桃の節句：ひな祭り
- c. 5月5日 こどもの日(国民の祝日)
- d. 7月7日 七夕
- e. 9月9日 重陽⁹
- f. 11月11日 介護の日、麺の日など¹⁰

(4a-e)は、五節句として重要な日であり、うち、1月1日と5月5日の2日が国民の祝日である。¹¹

1-5-2 カラオケ

日本で大人気のカラオケも「重なり志向」に大いに関係があると思われる。というのは、音楽に声を重ねる娯楽が、カラオケの基本だからである。このような発想は、日本文化の重なり志向の土壌から生まれたと考えられる。カラオケが日本発であることが、日本文化の重なり志向をより説得力のあるものになっている。

カラオケに対し、無伴奏のアカペラは日本的というわけではなく、教会音楽を起源としているので、西洋発である。

1-5-3 扇子

自分で風を送り涼しくするための道具として、団扇(うちわ)と扇子(せんす)があるが、より日本的なのは扇子である。団扇は古代中国や古代エジプトでも使われていたからである。

一方、扇子は、団扇を折りたたんで携帯に便利にするというアイデアから生まれたが、これは8世紀の古代日本にさかのぼる。すなわち、重ねて小さくするという意味での「重なり志向」も、日本発なのである。

1-5-4 台所とトイレと井戸の共通点

古来、台所(かまど)とトイレ(厠)と井戸は、異界の入り口と言われて来た。つまり、異界との接点、言い換えれば、異界と重なり合っている場所ということになる。

現在は、このような意識を持つ日本人は極めて少ないかもしれないが、水のあるところは異界とつながっているという発想は、海の向こうに常世が存在するという発想と共通するものがある。この世と常世が海で隔てられているということは、海がこの世と常世を重ね合わせる役割をしているとも言えるので、台所とトイレと井戸にも、同様の重なり志向が見て取れる。

1-6 日本の遊びと「重なり」

一昔前、子供の遊びでメンコ(面子)が流行っていたが、これは、あるカードに別のカードを重ねるようにたたきつけることを基本とするゲームである。しかし、ゲームにおける重なり志向は日本人特有とは限らない。というのは、西洋発のトランプが、重なり志向的ゲームだからである。この節では、日本的な遊びに浮かび上がる日本特有の重なり志向を述べることにする。

1-6-1 折り紙

折り紙は、紙を折って何かを作る日本の伝統的な遊びであるが、紙を折り重ねることを基本的な方法とするので、折り紙は、重なり志向の代表的な遊びと言えるであろう。

その起源は知られていないが、最古の文献が、1680年にあり、井原西鶴によるもので、「一昼夜独吟四千句」の中に出てくる。

ちなみに、熨斗(のし)も、熨斗鮑の包みが様式化したもので、一種の折り紙と言える。これは儀礼折紙の一例である。

1-6-2 紙芝居

1930年代に日本で誕生した紙芝居は、絵を見せながら演じ手が語って進める芝居的な演技で、子供たちに人気であった。紙芝居は、正に、紙を重ねて、1枚ずつ出して語るという手法をとるので、重なり志向が編み出したものと言える。

世界に似たものが確認されないので、日本的と言える。インドネシアのバリ島やジャワ島で行われる影絵芝居や紙人形芝居は、紙芝居に似ていると言えないこともないが、重なり志向ではない。

1-6-3 語呂合わせ

語呂合わせは、日本人が好んで用いるもので、言葉遊びとして楽しむだけでなく、何かを覚えるときに用いたり、覚えてもらう時に使ったりするものである。覚えてもらうのは、主に宣伝のためで、電話番号などに語呂合わせを用いることが多い。

(5) 0120-184-550 (一ツ橋、ゴゴオー) [予備校一橋学院]

数学における定数の覚え方も語呂合わせを用いる。以下の円周率などは、実用的な側面というよりも、殆ど言葉遊びである。

(6) 円周率の覚え方

3. 141592653589793238462643383279...

身1つ世1つ生くに無意味曰く泣く身に宮城(ミヤシロ)に虫さんざん闇に泣く....

この語呂合わせという手法は、数字に音を重ねることにより、意味も重なるという、重なり志向が、言語レベルで如実に現れたものと言えよう。

1-7 日本人の精神性と「重なり」

日本人の傾向として、グループを作りたいということがある。団体旅行や集合写真にその傾向が表れている。団体に旅行をしている姿は、日本人が折り重なって見えるし、さらに、集合写真では、時に本当に誰かが誰かに重なっている状況が見えるものである。これは、日本文化の重なり志向と結論付けるのは、いささか気が引けるが、この節では、日本人の精神性と重なり志向との関係を浮き彫りにしたい。

1-7-1 模倣性

日本人は、独自のものを生み出すよりも、真似をするのが得意とされ、戦後の経済発展も、アメリカなど先進国の真似をし、また、商品開発も真似をし、そこから少しでも改良を加えて、より良いものを作ることに長けていたことが主たる要因と考えてよいだろう。

真似をするということは、「他者が生み出したオリジナルの行為を重ねること」である。これを通じて、色々な発展があるものである。実験も重ねることにより、良い結果が得られるように、物まねをしつつ、新しいことを発見するということがある。

日本の英語教育では、日本的英語を確立することは原則とせず、本場の英語のコミュニケーションができることが基本的なテーマで、これも、日本人の英語を、例えばアメリカ人の英語に重なるほど良いと発想している点で、英語教育にも重なり志向が生きていると言える。¹²

1-7-2 曖昧性

日本人は、対立を避けるため、明確な答えを避ける傾向があるとされる。日本人の Yes は時々 No を意味し(=Yes が No に重なる)、日本人の No は時々 Yes であると言われ(=No が

Yesに重なる)、結論はなかなか最後まで言わない傾向があり、むしろ「そう考えない向きもないとは言えない」など、不思議な言い方も存在する。

この曖昧性は、一般化すると「XとYという異なるものを重ねる」という重なり志向の帰結であると言える。

1-7-3 義理と人情

義理と人情という言葉が、日本人の精神性を表す代表的コンセプトの例であるが、この義理と人情が重なる場合が時々ある。その場合、義理とは「これまでのことから当然こうすべきだ」という感情で、人情とは「とはいうものこうしたい」という感情となる。つまり、shouldの感情とwantの感情が重なるのである。

上記のように、義理と人情で板挟みになるという状況もあるが、昔、お世話になったから恩返しをしないといけないという感情である義理に、人間的優しさの人情が加わり、つまり、義理と人情が重なって、人に対して恩返しの行為を積極的に行うという側面もあると思われる。

いずれにしても、義理と人情は、重なり志向性がある(=重なる可能性がある)と言えるのである。

なお、義理のみに注目すると、義理の感情とは、「以前のXという行為が原因でYという行為をすべきと思うこと」となり、XとYを切り離さない、すなわち、重ね合わせるといふ重なり志向であることが分かる。¹³

1-8 日本の象徴主義と「重なり」

一般的に、「Xを全く異なるYで表すこと」が象徴の定義である。日本の芸術は象徴的なものが多いと言える。例えば、枯山水庭園では、島(X)を石(Y)で、海(X)を砂(Y)で表している。別の言い方をすると、象徴とは「YにXを重ねる『重なり志向』である」と言える。つまり、枯山水庭園における先ほどの例では、石に島を、砂に海を重ねる発想を用いている。枯山水については、1-2-1で論じたので、この節では、あと2つ代表的な象徴芸術と重なり志向の関わりを紹介する。

1-8-1 生け花

日本の生け花は、単に花を生けて楽しむという芸術ではなく、花を生けることが、宇宙を表すことにつながる高邁な思想をも有している。つまり、花に宇宙を重ねて鑑賞しているのである。

植物は、花と葉と茎からできているが、花は3次元、葉は2次元、茎は1次元を象徴しているので、宇宙を表すことにつながると思われる。

物理的に花が重なり合うだけなら、日本に限らず、他の国でもあり得るし、その場合は、

単なる「(花の) 重なり」であって、「(生け花の)重なり志向」とまでは言えないであろう。

1-8-2 水墨画

水墨画の世界は奥深い。というのは、「墨に五彩あり」という原理があり、墨は黒一色ではなく、次のような色から成り立っているとされている。¹⁴

- (7) a. 焦：焦げたような色合い
- b. 濃：黒がはっきりとしている状態
- c. 重：重々しく感じる色合い
- d. 淡：黒がうすくぼんやりしている状態
- e. 清：殆ど黒を感じない色合い

つまり、現実の黒一色に5つの味わいを重ねてみているのである。これは重なり志向のなせる技と言える。

さらに、余白の部分に余韻を持たせ、想像力を掻き立てるような仕組みになっているとも言われる。つまり、余白に想像物を重ね合わせるといふ重なり志向も働いている。

1-9 日本の神仏習合と「重なり」

日本の宗教は、主として神道と仏教である。神道には「八百万」(やおよろず)という言葉回しがあり、神が多数存在する。一方、仏教も仏像が多く作られていることから分かるように、多くの如来や菩薩、明王や天が存在する。つまり、大雑把に言うと、日本は、宗教的には多神教の国である。多神教は、多くの異なる神が重なるように存在するだけでなく、1柱の神や1体の仏であっても、例えば、アマテラスや阿弥陀仏は、あちこちで祭られていることから分かるように、1つの神や仏も重なり合っているという側面がある。

しかし、この重なり志向は、日本独自のものではなく、多神教の国には見られることである。この節では、日本独自と思われる、宗教面の重なり志向を論じる。

1-9-1 宗教的複数性

日本の宗教事情に関し、頻繁に論じられるのは、宗教的複数性(religious plurality)である。日本人は仏教と神道の両方に属していること(それゆえ、日本の宗教人口が全人口を遥かに超え、1億8千万人ぐらいになっている)、また、日本人は、神道の神社と仏教寺院の両方を参詣すること(そのため、初詣では神社も寺も大いににぎわう)、更に、家の宗教が神道や仏教であっても、個人的にはキリスト教や、そのほか、新宗教などを信じている場合があることなどが、宗教的複数性の代表例とされており、これが日本特有の現象であると言える。つまり、このことは異なる宗教が、日本人の心の中で重なり合うことがきわめて自然になっているのである。これは、宗教における重なり志向の典型例と言えるであろう。

もう一つ、重なり志向の例として挙げられる宗教現象は、「神仏習合」である。神仏習合

が重なり志向であるとするのは、神道と仏教が重なり合う現象だからである。具体的には、大日如来の垂迹(すいじゃく：神として日本に現れた形)がアマテラスで、阿弥陀如来の垂迹が八幡神というような本地垂迹説(仏教が主で神道が従)という考え方が、初期の段階の神仏習合のあり方であった。次第に神道が主で仏教が従の反本地垂迹説も現れた。いずれにしても、神仏習合のあり方は、神と仏が重なり合うという重なり志向そのものである。

1-9-2 神道的四魂性

神道において、神の性質が4つに現れるという四魂という発想が存在する。その4つの魂とは、次のようなものである。

- (8) a. 荒魂：あらみたま →荒々しい魂
- b. 和魂：にぎみたま →穏やかな魂
- c. 奇魂：くしみたま →不思議な力を持つ魂
- d. 幸魂：さきみたま →幸せにする力を持つ魂

(8a-d)は、1柱の神の4側面と捉えることもできるので、神は4つの魂を重ね合わせていると発想できるので、ここでも、日本文化特有の重なり志向が見受けられる。¹⁵

神道では、人は死ぬと神になるという発想があるが、同時に「自然＝神」でもあるので、自然・神・人が重なり合うと言える。確かに人間は自然の一部で、死ぬと神になる。

また、生まれるときも、神聖な「子宮」(子の宮)からこの世に出るので、赤ん坊自体が神聖を帯びる。赤ん坊＝神とも規定できるのである。

これらの発想は、重なり志向以外の何者でもない。この重なり志向は、日本の専売特許でもないのは、本来外来の仏教でも、人は仏になる可能性があるとするからである。しかし、他の仏教国と同様、重なり志向であることには変わらない。

1-10 日本語と「重なり」

日本語は、例えば、「私の友達のお母さんの家の中の部屋の壁の色（は赤い）」などの表現に「の」が7つ出てきているが、決して不自然な感じはしない。ところが、英語では、the color of the walls of the inside of a room of the house of the mother of a friend of me (is red)というように of を連続させることは決してない。通じないことはないけれども、非常にまずい英語である。英語で、「私の友達のお母さんの家の中の部屋の壁の色は赤い」と表現したければ、次のようになるであろう。of は1つで済む。

(9) The walls in a room of my friend's mother's house are red.

つまり、日本語は、「の」を「の」に当たる英語の of より多く連続させることが可能であることが分かる。しかし、これは、「の」の特性のようなもので、「を」や「に」をこのように用いることはできないので、この「の」の現象をもって、(日本語助詞の「の」は重なり志向ではあるものの、)「日本語全体が重なり志向である」と結論付けるのは、いささ

か早計であろう。この節では、日本語が重なり志向言語である証明を別の角度から行うことにする。

1-10-1 語彙面の重なり

日本語には、比較的同音異義語が多く存在する。アクセントが若干異なることを無視すると、「こい」と発音する単語は、主なものだけでも、次のように多く存在する。¹⁶

- (10) a. 鯉
- b. 恋
- c. 故意
- d. 濃い
- e. 請い¹⁷
- f. 乞い

また、同綴異音意義語(日本語の場合は、正確には「同字異音意義語」)も、比較的多く存在する。例えば、「大家」と書く表現に3つの読みがある。¹⁸

- (11) a. おおや：家主
- b. たいか：巨匠
- c. たいけ：社会的に地位の高い家

(10)の例は同じ発音に異なる漢字と意味が重なる現象で、(11)の例は同じ漢字に異なる発音と意味が重なる現象である。つまり、一般化すると、同じXに複数のY(そしてZ)が重なるという重なり志向が見て取れる。

単語の成立形式が似ているものが多数発見できるのも、重なり志向の言語であることの証明となるのではないかと思われる。

(12) a. <○っ○り>形式

例：すっかり、すっきり、めっきり、どっきり、どっさり、どっかり、
しっかり、しっとり、べったり、べったり・・・

b. <○×○×>形式

例：どんどん、どしどし、どかどか、つかつか、ぽかぽか、ぽつぽつ、
ぽろぽろ、ぼろぼろ、ぼちぼち、ぼうぼう・・・

特に、(12b)形式は、○×の重なりで単語ができ、同形式の単語もいろいろと存在するので、二重に重なり志向が重なっている感がある。

1-10-2 文法面の重なり

次の日本語の複文を考察する。

(13) 私は彼女が台風が来ると言ったと思うよ。

(13)は、次のように、綺麗な入れ子型の構造となっている。

(14) [私は [彼女が [台風が来ると] 言ったと] 思うよ]

また、品詞に着目すると、 $\langle X+Y \rangle$ の繰り返しが見られる。

(15) NP + NP + NP + VP + VP + VP (但し P は助詞を表す)

(14)と(15)を観察すると、入れ子の重なりと XP (X は N または V) の重なりという2つの重なりが浮かび上がり、日本語自体が重なり志向の言語であることが分かる。¹⁹

もう一例、単文の場合を考察する。

(16) 彼は人前で先生に性格を批判されたくなかったようだ。

(16)における助動詞を $vX(X=1, 2 \dots n)$ として、構造式を示すと、次のように成る。

(17) NP + NP + NP + NP + V + v1 + v2 + v3 + v4 + v5

vX の助動詞の種類を示しておく。

(18) a. v1=受身 される

b. v2=希望 たい

c. v3=否定 ない

d. v4=過去 た

e. v5=推量 ようだ

(17)を見ると、NPが4つ重なり、 v が5つ重なっている。このように、単文でも、助動詞が重なることが多い。日本語は、正に、重なり志向の宝庫と言っても過言ではない。²⁰

1-10-3 論理面の重なり

日本人は対立を避けるために、曖昧な言い方をする傾向にある。はっきりと YES と NO を表明するというよりも、YES と NO の間にグレーにエリアが多く存在する。あるいは、YES と言っても NO を意味したり、NO と言っても YES を仄めかしたりするような面もあるのは 1-7-2 で述べた。

YES と NO が峻別されず、グレーエリアがあるということは、「徐々に YES と NO が重なっている」ことを意味し、また、YES=NO であったり、NO=YES であったりすることは、「はっきりと YES と NO が重なっている」ことを意味する。

西洋人が好む論理的展開は、曖昧性という重なり現象はなく、 $A \rightarrow B \rightarrow C \dots N$ という直線的に進むのであるが、日本人の論理は、 $A \cdot B \cdot C \sim \sim \sim N$ のそれぞれの要素が、重なり合って曲線的に進む側面がある。

更に、西洋では、論理的な話に感情を移入することを極度に嫌うが、日本人は理性と感情が重なり合う面もある。例えば、日本人がディベートを行うと、「何でわからないの？」という感情的な言葉が、突如として表れることがある。或いは、「そんなにごちゃごちゃ言わなくてもいいじゃないか？」などという発想、理由を聞かれて「なんとなく」が答えとして成立する環境など、日本人の論理の中に、感情、更には何か分からない「プラス α 」が重なることがありうるのである。

2. 「重なり」からの派生

1章で論じたように、「重なり」というキーワードでかなりの日本事象が説明できるのだが、「重なる」というイメージから派生・発展するイメージに以下の10種類が存在すると思われる。

- (19) a. 「重なる」→ XにYが覆い重なる → 「包む」
- b. 「重なる」→ XとYを重ね合わす → 「合わせる」
- c. 「重なる」→ Xを曲げて、自らの上に重ね続ける → 「巻く」
- d. 「重なる」→ 細切れのXをYに少しずつ重ねる → 「蒔く」
- e. 「巻く」→ 1回だけ巻く → 「回す」
- f. 「巻く」→ ゆっくり優雅に巻く → 「舞う」
- g. 「巻く」→ 途中まで巻く → 「曲げる」
- h. 「巻く」→ しっかりと固定するように巻く → 「結ぶ」
- i. 「蒔く」→ 力を入れて蒔く → 「振る」
- j. 「回す」→ 回って元に帰る → 「戻る」

(19)で、「重なり志向」から展開するイメージが10に増えたが、具体的にそれぞれのイメージが日本文化のどの分野で生きているかを検証する。

2-1 「包む」

「包む」という行為は、物にカバーとなる別の物を重ねることに過ぎない。この節では、この包む文化を象徴する現象を2つ取り上げたい。

2-1-1 風呂敷

風呂敷は、江戸時代に銭湯の普及と共に、入浴用品や衣類を包むものとして普及したのであるが、Aが風呂敷で、Bが風呂敷によって包まれるものと考え、「AをBに重ねる」という重なり志向性が感じられる。

西洋文化において、風呂敷に代わるものは、鞆であるが、これは、重ねるという発想では捉えにくい。やはり、「AにBを入れる」という発想になるであろう。

2-1-2 包装紙

日本人は綺麗好きということもあり、物を購入しても包装にこだわる側面がある。少なくとも、綺麗に包装してもらいたいという感覚を持っている。人に贈り物をするときは、熨斗紙も添える。

チョコレートを包む場合も、極端な場合は、8重になってしまう可能性がある。

- (20) a. 第1層：チョコレート1つずつを銀紙で包む
- b. 第2層：1つずつチョコレートが入る仕組みのプラスチック容器に置く

- c. 第3層：そのプラスチック容器を透明のビニールで包む
- d. 第4層：チョコレートが入ったビニールをそのまま紙でできた箱に入れる
- e. 第5層：その紙の箱に熨斗紙を添える
- f. 第6層：その熨斗紙付きの箱を包装紙で包む
- g. 第7層：その包装された箱を薄いビニールの袋に入れる
- h. 第8層：その薄いビニール袋を厚い紙袋に入れる

日本の包装文化は、重なり志向の極致と言えなくもない。

2-2 「合わせる」

日本人は「合わせる」ということが極めて好きな民族である。食事のときに手を合わせる。神棚に手を合わせる。仏壇に手を合わせる。手を合わせる行為もあちこちで見られる。

手だけでなく、行動そのものからファッションまで人に合わせることも多い。人と違って嫌う傾向がある。意見まで人に合わせる人もいるのも事実である。

この節では、日本の伝統文化に見える「合わせる」行為について言及することにする。

2-2-1 貝合せ

「貝合せ」という遊びが平安時代からあった。実は、貝合せにも、次の2種類がある。

(21) a. 平安時代の物合せという遊びの1つ

左右に別れ、貝の形・色・大きさや種類の豊富さで優劣を競う遊び

b. 平安時代末期から行われた貝殻を合わせる遊び

360個のハマグリの貝殻を左貝と右貝の両方に分け、右貝を地貝(じがい)、左貝を出貝(だしがい)と呼ぶ。地貝を全て、甲を上にして並べ、出貝を1個ずつ出し、これと合う地貝を多く選び取った者が勝ちとなる。後世、左右の貝の裏に絵または歌の上の句・下の句などを書き込んだ。

この貝合せは、正に、合わせることを主眼とする遊びである。

2-2-2 連歌

連歌は、和歌から派生した詩歌の一形態で、575の長句と77の短句を、交互に重ねていく形式をとる。各句は独立しつつ、前句との2句間に詩趣を構成するところに特徴がある。形式としては100句を続けるのが基本である。

この連歌は、それ自体で、次々に句を重ねるので、重なり志向と言えるが、前の句(77の短句)と次の句(次の575の長句)の連続性(=意味を合わせること)に芸術性がある。単に、57577を重ねるだけではなく、意味的にもつながりを持たせるところが、重なり志向の発展版と言えるであろう。

2-2-3 襖

襖は、部屋の仕切りとして機能するのであるが、逆に言うと、襖を取り除けば、複数の部屋を合わせて、1部屋にすることができるので、「合わせる」という発想と関わりがあるのが分かる。

西洋のドアは取り外せないし、西洋建築における壁も取り外せないので、建物内の各部屋は独立しているので、西洋には、襖に見られる「合わせ志向」はないと言ってよいだろう。

2-2-4 見合い結婚

2つの物を一緒にすることは「合わせる」、2人の人を一緒にすることは「合わせる」という日本語になり、どちらも「あわせる」と発音するところが興味深い。見合いは、結婚を前提として付き合うかどうかを目的として人が会うことで、広い意味で「合わせ志向」と言えるであろう。事実、「見合い」ではなく、「見合い」という漢字が用いられている。

仲人を介した見合いは、江戸後期からの風習であるが、「仲人」の存在自体が、日本社会の「合わせ志向」（「合わせ志向」と言ってもよい）を如実に証明している。

2-3 「巻く」

一次元の紐のようなものや、二次元の布のようなものを、1回以上丸めて重ねると「巻く」という行為になる。この節では、日本文化に関係する「巻く」事象を検討する。

2-3-1 絵巻物

絵巻物は、小学館発行の『原色日本の美術』という全33巻の中の1巻として成立するほど、メジャーなジャンルである。²¹

現存する絵巻物の数は、原本（中世以前に描かれたもの）だけでも、百数十種類を数える。絵巻物に似たものは、古代中国にもあり、平安時代における日本独自の絵巻物の発生も、この中国の影響が全くないとはいえないものの、その後の発展が目覚ましい。絵巻物は一度も廃れることなく、後の時代へと引き継がれていく。

絵巻物は、「重なり志向」の発展型である「巻き志向」をそのまま具現化したものであると言える。

2-3-2 鉢巻と腹巻

頭の横周りを「頭の鉢」とよぶので、頭に巻く「はちまき」は鉢巻から来ている。この鉢巻は、元来厳粛な信仰行事に携わっていることの表示の機能があり、平安時代から使用されている。

一方、腹巻も起源が古く、奈良時代から平安時代にかけて、鷹飼や伎楽の装束の下につ

けたもの、または、平安中期から室町末期に用いられた鎧兜の一種から派生したものであるとされる。

2-3-3 帯

帯も体に巻くものであるから、巻き志向による産物である。女子の帯は、表着の染織工芸の発展とともに次第に装飾化し、18世紀後半になると女装美の中心となったと言える。

西洋のベルトも、帯同様、腰に巻くのであるが、帯ほど装飾性を強調しているわけではないので、ベルトは巻き志向ではあるが、巻き志向性が、日本の帯より強くない。

日本の着物の帯は、本当にぐるぐる巻きにする点も、巻き志向性が強いことの証明となっている。

2-4 「蒔く」

「AにBを重ねること」は「AにBを蒔くこと」とほぼ同義になる。特に、Aが大きな物体で、Bが小さく細かな、粒状または粉末状のものであれば、ほとんど同じ意味となる。

また、「巻く」と同音異義の「蒔く」は、その言葉が表す手の動きが似ている。手で巻くような動きをすると、物を蒔くときの動きと差があまりないからである。「巻く」は「蒔く」に発展するとも言える。この節では、そのような「蒔く」ということについて考察する。

2-4-1 蒔絵

蒔絵は、漆工芸の装飾法の一つであるが、加飾しようとする面に漆で文様を描き、その上に金・銀・錫の粉や色粉を蒔いて固めたものを言う。

蒔絵の名前が、記録に現れ、作品にも残るのは、平安時代の中期以降である。貴族社会の間に流行し、寺院建築・家具調度・文房具等の装飾に応用された。しかし、時代が下るに連れて、武士や庶民の間にも広く用いられることになった。

2-4-2 豆まき

節分の行事で「鬼は外、福は内」と唱えながら、豆を蒔く（＝撒く）ことが豆まきである。「豆投げ」とは言わないところが、重なり志向の発想であることが分かる。豆を空間に重ねるようにするイメージが豆まきであり、豆投げなら、目的物に当てることをイメージするので、「当て志向」であって、「重なり志向」ではないであろう。

本当のところは、鬼という目的物に当てるので、「豆投げ」が命名としては適切なのに、敢えて「豆まき」と言うところが、日本文化は全体的に「重なり志向」であることの証明と考えてよいのではと思われる。

2-5 「回す」

重なり志向から発展した巻き志向を別の角度から見ると、回し志向となる。巻き志向では1つのものを意図的に複数回転させるイメージがあるのに対し、回し志向は、複数のものを意図的に1回転させるイメージがある。

意図的であれば回し志向であるが、意図がなければ回り志向となる。回り志向は、科学の分野で多く観察される。例えば、宇宙における惑星などは物理法則に則り、自然に回っているのであるから回り志向性を持つということになる。

この節では、回し志向と回り志向の2つを、日本事象から選び出し論じることにする。

2-5-1 回転寿司

寿司は日本独自の文化を持つし、その寿司と日本文化における回し志向が見事に組み合わせられたものが回転寿司ということになる。寿司のように、複数の種類の適度な大きさの食品だからこそ回せるのであって、回転丼などはたくさん食べられないし、回転ケーキも甘そうでうんざりする可能性がある。やはり、回転寿司とは日本文化の回し志向の代表と言えよう。²²

食事をベルトコンベアに載せて回転させて出すという発想は、日本が初めてで、現在世界に存在しないであろうと思われる。

なお、巻き寿司は巻き志向の食品の代表と言えるが、これが回転寿司店で回せば、巻き志向と回し志向がコラボした形である。

2-5-2 根回し

根回しとは、あらかじめ関係者に意図や事情などを説明し、ある程度までの了解を事前に得ておくことを意味する。木を移植する際に周囲をあらかじめ掘って根を一部切り落とし、細根を発達させておくことが、元の意味で、ここから転じて、交渉の意味になった。

敢えて情報や意見を回してコンセンサスをとっておくという手法は、意図的な回し志向であるが、これは会議を開いて情報を開示し意見を戦わすことにより、コンセンサスを得るという西洋の手法より、効率的で効果的であると指摘されることが多い。

2-5-3 輪廻転生

仏教には輪廻転生という発想があり、これは、思想における回り志向である。日本に根付いた仏教の基本原理として機能している。死んであの世に行った魂がこの世に何度も戻ってくることを輪廻転生と言うので、「この世→あの世→この世→あの世・・・」という形なので、この世とあの世を行ったり来たりすることなので、細かく見ると、回り志向でないように感じるが、この世に6種類あり、長期的には、この6種類の世界に転生するので、この6種類の世界をぐるぐる回るイメージが出来上がる。²³

2-5-4 ハレ・ケ・ケガレ

日本化しているとはいえ、基本的に、仏教は外来の回り志向なので、純粹に日本的とは言えない。日本に固有の回り志向が厳然と存在する。それは、ハレ・ケ・ケガレという循環論（回り志向）である。

ハレは祭りや儀式・年中行事（非日常）、ケは普段の生活（日常）、そして、エネルギーが枯渇した状態をケガレ（気枯れ）という。この3つのレベルが循環するという原理が、日本民俗学に存在する。

ハレとケは、民俗学者の柳田國男によって見出された時間論を伴う日本人の伝統的な世界観である。これに、ケガレという発想を加えた〈ハレ→ケ→ケガレ〉の循環は、紛れもない回り志向と言える。²⁴

2-6 「舞う」

焦点が1つに定まっている「巻く」という現象を、焦点をずらし足り、複数にしたりして、2次元や3次元で引き起こすと「舞う」という現象になる。ここでは、日本文化に見られる「舞い志向」を考察する。

2-6-1 能

日本の伝統芸能を代表する能は、その踊りの側面が舞い志向となる。能で用いる踊りの型は「摺り足」で、ゆったりとした回転運動を基本とする「舞い」である。だから、能は舞い志向と言える。摺り足で、床の平面で舞うので、能は、2次元舞い志向である。

貴族や武士に人気の能に対し、庶民から指示された歌舞伎の踊りは、ダイナミックで舞いの要素は殆どなく、激しい上下運動なども見受けられるので、能の「舞い志向」に対し、歌舞伎は「跳び志向」と言えるであろう。

2-6-2 桜と雪

花見と言えば、桜を鑑賞することだから、桜は、日本人にとって花の代名詞と言える。桜は必ず散るが、その散り方が、3次元的に舞うイメージを持つ。

雪も冬景色に趣を添える自然事象であるが、雪の降り方も舞いの舞いである。桜と共に鎌倉時代の武士道精神につながる重要アイテムである。²⁵

2-7 「曲げる」

巻くことをぐるりと1回転させることなく止めると、曲げるという行為になる。このような曲げ志向は、日本文化のあちこちに見られる。この節では、その一部を述べるにとどめる。

2-7-1 注連縄

神道における代表的曲げ志向は、注連縄(しめなわ)に見られる。この注連縄の起源は、アマテラス神話にさかのぼる。アマテラスが天岩戸から引っ張り出されたあと、岩戸に二度と戻れないように注連縄で戸をふさいだことに端を発する。

注連縄は、神域と現世を隔てる結界の役割を持つ。だから、注連縄は神域と現世が重なり合うところに置かれると考えてもよい。つまり、注連縄は、重なり志向性を髣髴(ほうふつ)とさせる。同時に、注連縄自体が「曲げる」ということを通じてできるので、曲げ志向性も同時に見受けられる。

2-7-2 勾玉

勾玉(まがたま)とは、古代日本における装身具の1つで、C字型またはコの字型に曲がり、玉から尾が出たような形をしている。天皇家に伝わる三種の神器の1つにも数えられる。勾玉は形状から、曲がり志向の装身具ということに違いはない。²⁶

武寧王陵など韓国内の王墓からも発見されているが、これらは日本から伝播したものであるという説が有力である。

2-8 「結ぶ」

巻く行為を1回行い、しっかりととめると結ぶ行為になる。結ぶという行為は、日本文化では非常に重要と言える。というのは、贈答品や祝儀袋につける水引は、基本的には、金品を結ぶためのものである。

また、おみくじを引いた直後、木の枝に結びつける行為を行うことがある。良い結果が結ばれる(=結果として起こる)ようにとの願いの表れである。²⁷

この節では、代表的な結び志向の発想に触れる。

2-8-1 おむすび

古事記に登場する三柱の神、天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)・高御産巢日神(たかみむすびのかみ)・神産巢日神(かみむすびのかみ)は、天地が分かれて初めて現れた神である。これらの神に現れる「産巢日」(むすび)は、天地万物を生み出す霊妙な力の意味であり、太古の日本人が、神格化された山を象った三角形のご飯に、そのような結びの力がこもっていると考えたのが、「おむすび」の始まりとされている。

だから、おむすびは三角形で、おにぎりは丸型という違いがあるという発想が生じた。

2-8-2 縁結び

「縁結び」という言葉は、日本人にはなじみがある言葉であるが、実は次のように3つの意味がある。(ヤフー辞書による)

(22) 縁結び

- a. 男女の縁を結ぶこと、縁組み。
- b. 思う人の名と年齢を小さな紙に書いて折り、社寺の格子や木の枝などに結んで、夫婦になれるように祈願すること。
- c. 遊女の間に行われた一種の遊戯。多くの男女の名を、それぞれ小さな紙片に書いてひねり、でたらめに結びあわせて占うこと。宿世(すくせ)結び。

日本文化においては、縁という発想が重視されるのは言うまでもない。その「縁」と最も結びつきやすいプラスイメージの言葉は、「縁結び」と思われる。

2-9 「振る」

蒔くという行為を別の角度から見ると振るという行為に見える。例えば、手で何かを巻いている姿は、手の動きだけを見ると手を振っているように見える。

実は、振るということが日本文化に与える影響は大きい。特に神道の分野で大きな役割を果たしているのである。この節では、2つの重要な事象に触れる。

2-9-1 魂振り

神霊に振動を与えて霊威を強化することを魂振りと呼ぶが、さまざまな状況が魂振りになりうる。

例えば、神社で手を打つ拍手の音(=音エネルギー)が神霊を震わすし、神輿(みこし)を激しく振り動かすこと(=運動エネルギー)が神輿内の神霊を震わすことになる。

笑うことも魂振り効果があるとされる。笑うことにより、神霊は霊威を増し、笑った人に対し、良いエネルギー(=福エネルギーとでも命名できる)を与えることになる。だから、「笑うかどには福来る」というのは、神道的に真理と言える。

これが、人の魂に対しても起こりうるものと発想し、『万葉集』を繙(ひもと)くと、恋する相手に袖を振ることが、その人の魂を引き寄せまじないになっていることが分かる。日本人が「いってらっしゃい」と手を振る行為は、魂振りの意味を持つのである。

昔の人は、旅に出かける人に対して、手や袖を振ることによって、神霊を引き寄せ、その神霊の加護によって旅が安全になるようにと祈ったようである。

2-9-2 天孫降臨

振る行為を上から下に行うと「降る」ということになる。振る志向は降る志向に発展するのである。そして、振る志向に比べ、降る志向は、それほど多く日本文化に表れない。しかし、神話における天孫降臨は重要な降る志向型の事象と言える。

天孫降臨とは、アマテラスの命を受けて、孫のニギノミコトが、高天原から日向(ひむか)国の高千穂峰に降ったことを意味する。

2-10 「戻る」

日本人の論理は、直線的というよりも曲線的で、首尾一貫せず、話が元に戻るということも多いとの指摘がある。議論が堂々巡りになるようなことも多い。「回る」ということを1回限り行い、起点と終点を意識すると、「戻る」ということになる。この節では、日本文化の戻り志向を考察する。

2-10-1 十二支

十二支は、子(ね)から始まって子に戻る。更に、「子」という漢字は、「一」(=はじめ)と「了」(=終わり)を組み合わせたものだと言及できる。正に、はじめから終わりを一気に表す単語と言える。「子」は、戻り志向を如実に表す漢字と言える。

(23) 十二支

子→丑→寅→卯→辰→巳→午→未→申→酉→戌→亥

2-10-2 還暦

還暦も戻り志向である。還暦とは、数え年61歳のことであるが、正確には十干十二支による「生まれ年の干支(えと)に戻る年」のこと。十干十二支による年は60年で一巡するので、61年目に同じ干支に戻る。

(24) 十干(じゅっかん)

甲(きのえ)→乙(きのと)→丙(ひのえ)→丁(ひのと)→戊(つちのえ)→

己(つちのと)→庚(かのえ)→辛(かのと)→壬(みずのえ)→癸(みずのと)

※1 「き」は「木」、「ひ」は「火」、「つち」は「土」、「か」は「金」、
「みず」は「水」。

※2 「え」は「兄」、「と」は「弟」。

2-10-3 王政復古

日本における王政復古とは、明治維新により武家政治を廃止し、君主政体に戻した政体転換を指す。1867年、第15代将軍徳川慶喜により、大政が奉還されたとき(=「王政復古」と言う)に、王政復古が実現した。

天皇の政治に戻る現象は、日本史上でもう一つある。「建武の新政」と呼ばれるものである。1334年、後醍醐天皇の元に天皇親政が復活したことを言う。

復古という現象は世界中にあるのだが、日本の復古は特別な様相を呈している。というのは、西洋世界が民主主義に転換するのに革命によって王政が倒されるのが一般的であるのに対し、日本は王政復古と民主主義・近代化が並行した点が歴史的に珍しいと言える。

3. 日本文化の重層性

日本文化は重層的に捉えることができる。言い方を変えれば、日本文化の特徴を説明する際も、重なり志向が有効であるということになる。この章では、3種類の重層性について、簡単に述べる。

3-1 日本の歴史発展における重層性

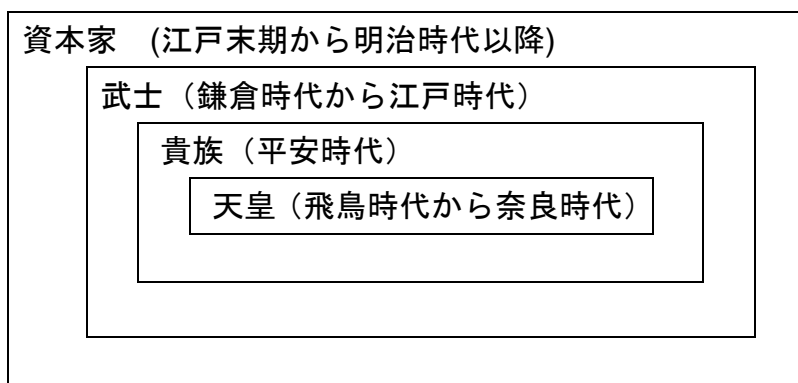
一般に、日本の歴史を世界の歴史と比べて、異なる点が幾つかあるが、顕著なのは、天皇という支配者が、別の支配者が現れたときに、抹殺されていないという点である。日本以外の世界の特徴としては、(25)のごとく、ある王朝が以前の王朝を滅ぼして成立し、その王朝も別の王朝によって滅ぼされるということが連続して起こることが多い。

(25) A王朝 → B王朝 → C王朝 . . .

ところが、日本では、最初に小国家が分立していたのを統一したのが、天皇家で、奈良時代にはその全盛期となった。そのうちに、天皇と姻戚関係を作って勢力を伸ばした貴族の藤原氏に政権を取られても、天皇は残った。やがて、貴族の荘園を守らせる目的で雇った武士が成長し、政権を取ったが、貴族や天皇は残した。更に、経済が発展し、資本家としての町人が力を持ったが、武士(士族)・貴族(公家)・天皇は残った。

つまり、次のような重層構造が日本政治史に見受けられるのである。

(26) 日本政治史における重層性

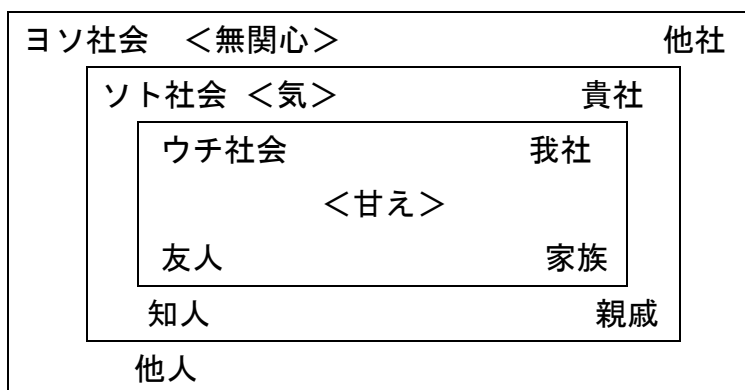


3-2 日本の社会環境における重層性

日本人は、他の民族に比べ、社会を3重に捉える意識が強く働いていると言われる。それは、ウチ社会とソト社会とヨソ社会という意識である。その重層性を、次ページに図式化する。

家族や友人、または自分が属する会社はウチ、親戚や知人、または取引先の会社はソト、他人や他社はヨソの社会に属し、ウチ社会では甘えが通じ、ソト社会では気を遣わねばならず、ヨソ社会では全く気を遣わない。²⁸

(27) 日本人のウチ・ソト・ヨソ

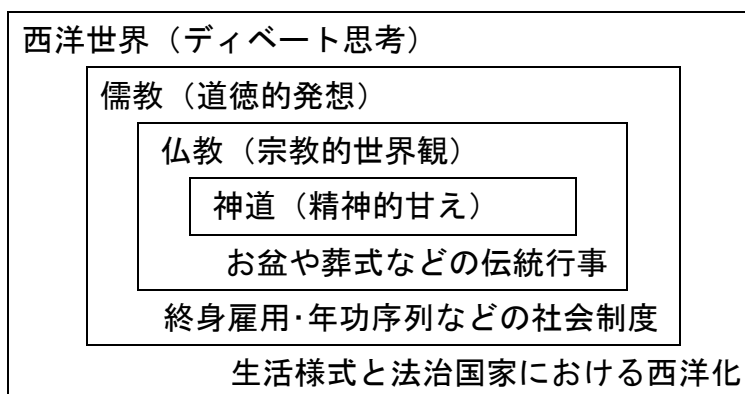


3-3 日本の精神文化における重層性

どの民族にとっても、宗教はその精神性に大きな影響を与えると考えてよい。日本人にもそのことは例外ではない。しかし、これまでに見たように、日本には宗教的複数性が存在するので、日本人の精神性も複雑性を帯びていると考えられる。

私は、次のような重層性のモデルを提案している。

(28) 宗教と日本人の態度の関係



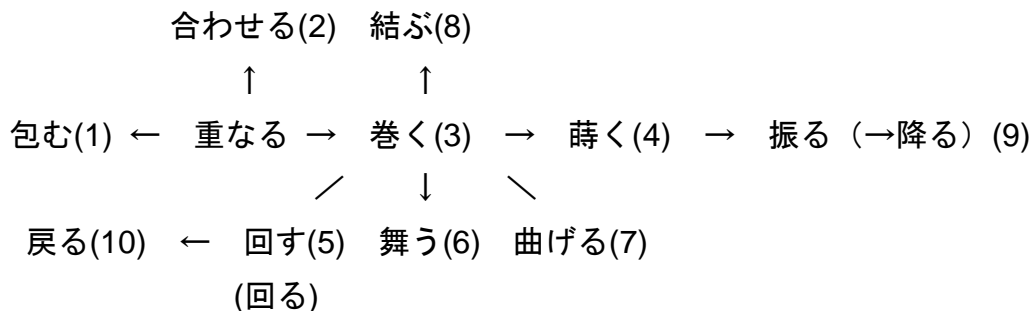
表面的には、西洋化された生活（洋服・マンション・法律制度など）があるが、物事の見方として儒教的な側面があり、伝統行事では仏教的影響が濃く、日本人の精神の中心には、やはり、神道的甘えの意識がある。²⁹

4. まとめ

第1章で「重なり志向」を表すと思われる日本事象を10種類に分類し説明することを通じ、日本文化は重なり志向であるということの実証を試みた。

第2章では、重なり志向から派生した10の志向性を示し、それぞれについて簡単な解説を施した。10の志向性は動詞の形で表すことができ、次のような派生に基づいていた。

(29) 重なり志向からの派生 10 系・・・但し番号は節の番号に対応



第3章では、重なり文化の発展形として、「重層性」という視点を取り上げた。日本文化に3つの種類の重層性が見受けられることを示した。つまり、歴史発展の重層性・社会環境の重層性・精神文化の重層性について簡単に述べた。

これらの章を通して、敢えて「何故日本文化は重なり志向なのか？」については、触れなかった。このことは今後の研究課題として慎重に考察したいからである。本稿では、日本文化の諸相を眺めていると、「重なり志向」であるということができると主張することが主たる目的であったからでもある。

しかしながら、現時点で、想定可能な重なり志向の基盤について、ここで整理しておきたい。「重なり志向」の理由として、安定性と神聖性と実用性の3側面が挙げられるのではないかと、私は考えている。

- (30) a. 重なる → 重い³⁰ → 安定性
- b. 重なる → 良いことが重なる → 浄化 → 神聖性
- c. 重ねる → スペースを節約 → 実用性

日本人は安定を好む。だから安定した形の富士山を信仰の山と拝み、安定した漢数字を持つ8という数字が好まれる。重なると重いイメージを持ち、それが安定を暗示するので、日本文化が重なり志向となったのではないかと推察できる。

一方、「重なる」を「良いことが重なる」と発想すると、日本人が嫌うケガレというものから脱却でき、自らを浄化できる。浄化は神道の重要テーマでもあり、神聖なことである。神聖なものにつながっていく「重なり」という概念が重視され、日本文化が重なり志向性を帯びたのではないかと推察できる。

第3点目は、もっと単純で、重ねることにより、スペースが節約でき、実用的になるから、重ねる発想が重要視され、日本文化が重なり志向になったのではないかと推理可能である。例えば、重箱は上の空間を使うことにより料理を置く平面スペースを節約でき、扇子は使用しない時、折りたたむことによりスペースを節約できる。風呂敷も、包まれるものの形に合わせることができるので、箱などよりもスペース的に節約できる。

最後に、日本文化が本当に重なり志向という志向性で大半が説明可能かどうかを再度慎重に考察することと、もし、重なり志向であれば、(30)に挙げた3点が、本当に重なり志向と整合性を持つか、また、それ以外に重なり志向の基盤が存在するかどうかについては、

今後の研究課題としたい。

注

1. 李御寧氏の『「縮み」志向の日本人』によれば、石川啄木の短歌を例にあげている。

(i) 東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたわむる

啄木は「東海の小島の磯の……」という風に「の」を繰り返して、大海を小島に、小島を磯から白砂へ、ついには蟹と涙一滴にまで縮めているということになる。

さらに、「縮み」志向の例として、茶室が小さいこと、盆栽が植物を小さく鉢に生けること、生け花で大宇宙を小さく凝縮して表すこと、幕の内弁当で豪華な本膳料理をコンパクトにまとめること、神社から神輿、神棚、お守りへと神霊を小さなものに宿らせることなど、様々な例を挙げることができる。

2. 日本は手の文化と言われるほど、「手」を用いた表現がきわめて多く、英語にしても hand という語は使用されないのが殆どだ。例えば、次のような表現がある。

(i) 手〇の表現：手紙、手形、手軽、手近、手頃、手順、手前、手心、手下……

(ii) 〇手の表現：切手、勝手、奥手、派手、女手、働き手、読み手、聞き手……

(iii) [手＋用言]の表現：手がかかる、手が早い、手に余る、手を切る……

(iv) 手を用いた慣用句：手八丁口八丁、手とり足とり、手に汗を握る……

「上手」や「下手」に至っては、それぞれ「じょうず、うわて、かみて」、「へた、したて、しもて」と読める。

3. 日本文化は左重視という伝統がある。「左」は「火足」(ひたり)が語源で、火は上に上るので神の方向であるから神を象徴し、「右」は「水極」(みぎわ)が語源で、水は下に流れるので人の方向であるから人を象徴するという説がある。だから左は上位で、上手(かみて)となり、左大臣は右大臣よりも上位だし、祝儀袋は左から折る。昔から天子は南面すると言われ、南を見て座ると左から太陽が昇るので、左は陽なる方向でもある。だから左は上であると発想するという考え方もある。

4. 神前で拍手を2度重ねるのは、「人と神が合わさるように」との望みを象徴するとされる。また、鏡餅を重ねるのは「福德が重なるように」との意味であるとされる。

5. 五重塔の相輪の部分が、元来のストウーパの部分なので、元来、相輪が主で、五重塔の五重の部分は付属品と言えるのである。

6. もちろん、人間が存在できない空中から見ると、15個になる。

7. ちなみに、「漆工」の英語は janner。更に、Javanese というと「ジャワ人」の意味である。

8. お正月における祝肴とは、お屠蘇(とそ)をいただくための肴で、蒲鉾・黒豆・田作り・栗金団(きんとん)・伊達巻などが代表的である。
9. 9 という数は、3 という陽の数の 2 乗、すなわち、 3×3 というように 3 が重なるので、重陽の数という。
10. 11 月 11 日は 1 が 4 つ重なるということで、カレンダー上の日としては、同じ数字が最も多く並ぶので、記念日が多く制定されている。このことも日本文化が重なり志向であることの証明になると思われる。11 月 11 日の記念日で主なものを以下に示す。
- (i) a. 介護の日：厚生労働省が 2008 年に制定。「いい日いい日」の語呂合わせ。
 b. 公共建築の日：4 つの 1 が建築の基本構造の柱のイメージと、国会議事堂の完成年月である昭和 11 年 11 月に因む。
 c. 配線器具の日：1999 年に日本配線器具工業会が 11 月 11 日に制定。コンセントの差し込み口の形状を 1111 に見立てる。
 d. 電池の日：日本乾電池工業会(現・電池工業会)が 1987 年に制定。乾電池の+-を「十一」(=11)に見立てる。
 e. 麺の日：全国製麺協同組合連合会が 1999 年に制定。1111 が麺のイメージ。
 f. サッカーの日：サッカーが 11 人対 11 人で行うスポーツだから。
 g. 折り紙の日：日本折紙協会が制定。1 を 4 つ組み合わせると折紙の正方形になるから。
 h. 下駄の日：伊豆長岡観光協会(現・伊豆の国市観光協会)が制定。下駄の足跡が「11 11」に見えるから。
 i. 鮭の日：「鮭」という漢字の旁が「十一」と「十一」に分解できる。
 j. ポッキー&プリッツの日：江崎グリコが平成 11 年に制定。同社製品のポッキーやプリッツを 6 つ並べると 111111 になる。
 k. 磁石の日：ピップフジモトが 1992 年に制定。N 極と S 極が「十」「一」だから。
11. 奇数が好まれるのは、割り切れない数なので強いイメージを持つからである。中国では、奇数は陽なる数とされていることから、そのことが窺える。しかし、日本人は、偶数においても重なる日を重視して、次のような日を設けている。
- (i) a. 2 月 2 日：頭痛の日→頭痛撲滅委員会が 2001 年に制定。「ず(2)つう(2)」の語呂合わせ。
 b. 4 月 4 日：おかまの日→3 月 3 日と 5 月 5 日の中間に位置するから。また、語呂合わせから「ヨ一ヨ一の日」や「獅子の日」でもある。
 c. 6 月 6 日：カエルの日→けろ(6)けろ(6)の語呂合わせ。他に、6 を 2 つ向い合せにすると耳の形に見えるので、補聴器の日でもある。

d. 8月8日：そろばんの日→全国珠算教育連盟が1968年に制定。パチパチ(88)の語呂合わせ。「ははは」の笑い声から「笑いの日」、8が瓢箪に見えるから「瓢箪の日」でもある。

e. 10月10日：目の愛護デー→中央盲人福祉協会が1931年に制定。10と10を横にすると眉と目に見えるから。他に、トト(魚の幼児語)に読めるので「釣りの日」、1010(千十)の語呂合わせから「銭湯の日」、10(テン)10(トウ)の語呂合わせから「転倒防止の日」。

12. 例えば、インドではインド英語を確立し、イギリス英語に対抗し、彼らの英語をイギリス英語に重ねようとする重なり志向は感じられない。

13. 西洋人は、Xという親切な行為には、その場で感謝の言葉を述べると、次のYという行為とは切り離して考えるのが普通である。XとYを重ね合わせることを行わない。すなわち、西洋人の精神性には、重なり志向がないと言えるのである。

14. 五彩の部分のコンセプトを、黒い順に英語にすると、次のように翻訳することが可能である。

(i) scorching → umbrageous → medium → indistinct → empty

この頭文字語は、SUMIE (=墨絵) となる。

15. 4つの魂に発展的連続性も想定できる。例えば、人が死ぬと荒魂の状態になるので、魂鎮めをする必要があり、魂鎮めをすると、荒魂は和魂となる。和魂は魂振りを通じて、神というレベルに発展させることができる。つまり、次のような発展性が見て取れるのである。

(i) 人 → 荒魂 → 和魂 → 神
 ↑ ↑ ↑
 死 魂鎮め 魂振り

複数の儀式を1つの魂に重ねることにより発展性が見られるので、これも重なり志向の例と言えよう。

16. 『広辞苑』には「コイ」と発音する単語を10個掲載している。

17. 「自分ですることの許可を願う」のが「請い」で、「相手にしてもらいたいことを頼む」のが「乞い」であることが多い。

18. ちなみに『広辞苑』には「タイカ」と発音する単語については15個も掲載がある。

19. ちなみに、同じ意味の例文で、英語の重なり志向性をチェックしてみる。

(i) I think that she said that the typhoon would come.

(ii) [I think [that she said [that the typhoon would come]]]

(iii) S V that S V that S v V [但し v は助動詞]

(ii)から入れ子型ではないことが分かり、(iii)からSVの形式が重なっているが、thatによって、リズムが阻まれている。また、vも存在するので、純粋なSVの重なりとは言

えない。従って、英語の重なり志向性は日本語より弱いと結論付けることができる。

20. 日本語の助動詞部分を英語に置き換えると、英語の助動詞が機能を果たさないので、種々雑多な構造が必要となる。つまり、英語では同じ品詞（＝助動詞）の重なりは起こらないのである。

(i) He seems not to have wanted to be criticized in public about his nature by his teacher.

(ii) 日本語の助動詞に相当する英語構造

	受身	希望	否定	過去	推量
日本語	され	たく	なかつ	た	ようだ
英語	be+p.p.	want to do	not	have +p.p.	seem to do

確かに、英語は助動詞が2つ重なるのを嫌い、will can の代わりに will be able to、will must の代わりに will have to が用いられる。しかし、品詞の重なりを嫌う現象は、助動詞にとどまらない。

(iii) He did not want to be made to study hard by his teacher.

(iii)にあるように、make+O+C（C=原形動詞）の構造を原則どおり受身にすると be made study という形になり、動詞が重なる。この重なりを避けるために、to が用いられるのであるが、このことは、「英語が日本語とは異なり、重なり志向性が低い」ということの証明となっている。

これまでの考察から、日本語は、以下のような一般構造式があると思われる。

(iv) $\Sigma(NP+P) + (V + \Sigma v)$ [但し NP は Noun Phrase の略、石井(2009)参照]

21. 第8巻が絵巻物を扱っている。

22. 回転寿司は、立ち食い寿司店経営者の白石義明が、ビール製造のベルトコンベアをヒントに考案し、1958年に、大阪府東大阪市の近鉄布施駅前にオープンした。ちなみに、寿司を回転させるコンベアは、ほぼ100%石川県で生産されており、日本最長は147m、最短は5mである。

23. 6種類の世界とは次の通りである。

(i) 天上界・人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界

24. ハレ(祭り)が終わり、ケ(日常生活)が再開されると、徐々にエネルギーが枯渇しケガレの状態が起こり、その結果、再度、祭りを行うことにより元気を取り戻すというシステムが必要となる。だから、ケガレからハレに向かう。従って、ハレ・ケ・ケガレは循環する。

25. 雪月花が自然美の代表となっているが、武士道の精神を代弁する側面がある。雪は舞うように散り、はかなく溶ける。月は、時間と共に欠ける。花は舞うように散る。この美しい3つアイテムは、見方を変えれば、命にとらわれない潔さを表す。だから、武士道の精神を表すことになる。

26. 三種の神器とは、天孫降臨のときにアマテラスから授けられたとされる鏡・剣・玉の3つをさす。正式名称は次の通りである。
- (i) a. 八咫鏡（やたのかがみ）
 - b. 八咫瓊勾玉（やさかにのまがたま）
 - c. 天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）
27. おみくじの内容が吉の場合は「結ぶ」、凶の場合は「縛る」という行為になるという説がある。
28. care をキーワードにすると、ウチ社会では carefree、ソト社会では careful、ヨソ社会では careless な態度が特徴的となる。このような精神構造を持っているから、日本人は、旅先で恥ずべき行為（例えば、ゴミを捨ててはいけないところに平気で捨てるなど）を繰り返すと批判される。
29. 神道的甘えとは、神道が多神教であることと深く関係する。生活のあちこちでさまざまな神に日本人は甘える。例えば、結婚を求めて縁結びの神に祈り、子供ができたなら安産の神に祈り、交通安全のためには交通安全が専門の神に祈るといった具合である。
30. 「重い」（＝中心概念は「重」）という言葉は、「慎重」や「貴重」などの言葉にも表れ、日本文化ではプラスイメージである。一方、heavy という英語は基本的にはマイナスイメージである(資料 2 参照)。何よりも、「重要」という言葉に「重」が入っている。英語の「重要」は important で、この語は、語源的に import([大切なものを]取り入れる) という語から派生している点が、動きを暗示する。日本語の「重」は動かないイメージを持っているのと対照的であるのが興味深い。

資料

1. 五重塔の相輪 <http://www.tctv.ne.jp/tobifudo/newmon/tatemono/sorin.html>



相輪は通常七つの部分から成っています。

- 宝珠(ほうしゅ) 釈迦さまの遺骨を納めるところ。
- 竜車(りゅうしゃ) 高貴な人をのせる乗り物を表します。
- 水煙(すいえん) 火炎の透し彫のデザインですが、火をきらうことから水煙と呼ばれます。
- 宝輪(ほうりん) 九つの輪。五大如来と四大菩薩を表します。
- 請花(うけばな) 前記までのものを受ける飾りの台。
- 伏鉢(ふせばち) お墓の原形、土まんじゅうの部分。
- 露盤(ろばん) 伏鉢の土台。

中央を貫く心棒の部分は、刹管(さつかん)または擦(さつ)といひます。相輪にはバリエーションがあり、宝輪が8個のもの、宝珠・水煙が他のものに置き換えられたものなどもあります。

■ 五大如来: 大日如来 阿閃如来 宝生如来 阿弥陀如来
不空成就仏

■ 四大菩薩: 普賢菩薩 (南東) 文殊菩薩 (南西) 観自在菩薩 (北西) 弥勒菩薩 (北東) / 上行菩薩、無辺菩薩、浄行菩薩、安立行菩薩の場合もあります。

2. heavy の形容詞の意味のみ抜粋 (プログレッシブ英和中辞典)

- (1) 重い, 重量のある; 比重の大きい; 〈衣料が〉厚い
(2) 〈物が〉(…で) 重い, (…で) いっぱいの((with, on ...))
- 2 大量の, 多量の, 程度[規模]の大きい; 〈森林などが〉密生した
- 3 ((略式)〈人が〉(…を) 大量に使う[買う, 食べる, 飲む]((on ...)); 〈車が〉(燃料などを) 多く消費する((on ...))
- 4 力が強い, 強烈な; 〈風・雨などが〉ひどい, 猛烈な; 〈海が〉荒れた, しけた; 〈戦闘・砲火が〉激しい
- 5 〈責任・罪・ニュースなどが〉重大な; 〈問題が〉ゆゆしい
- 6 〈仕事・業務が〉困難な, 骨の折れる; 〈期間・予定が〉多忙な, きつい
- 7 〈文章・文体・様式が〉わかりにくい, 重苦しい; ((略式)〈新聞・雑誌が〉まじめな; 〈ジャズなどが〉重厚な
- 8 〈線状のものが〉太い, 幅広い; 〈顔つきが〉太った; 〈体格が〉がっしりした; 〈服などが〉厚手の; 〈筆跡が〉肉太の

- 9 〈沈黙・眠り・ため息が〉深い;〈考えなどが〉深みのある, 深遠な
- 10 (悩み・悲しみで)元気がない, 〈心・気分が〉沈んだ;〈目つき・顔つきが〉悲しげな;〈空が〉陰うつな, どんより曇った;〈空気が〉むっとするような
- 11 〈悲しみ・運命が〉耐えがたい, つらい;〈税金などが〉過酷な, 重い;((略式))〈先生が〉(生徒に)厳格な, きびしい((on ...))
- 12 〈パンなどが〉よくふくれていない, なま焼けの;〈食べ物〉消化の悪い, しつこい, (胃などに)もたれる((on ...));〈においが〉ぷんぷんする
- 13 〈道が〉歩きにくい, ぬかるんだ;〈土が〉べたつく, 粘土質の, 耕しにくい;((米))〈坂が〉急な;《競馬》〈走路が〉重い, 重(おも)馬場の
- 14 ((限定))《軍》重装備の;〈砲が〉大口径の;〈爆弾が〉大型の
- 15 〈人が〉退屈な;愚鈍な;〈人の〉(動作などが)無器用な, ぎこちない;のろい((on, upon ...))
- 16 〈音・声〉太い;〈大砲・雷などが〉鳴り響く;《声》強勢のある
- 17 だいじな, 重要な;((略式))〈関係が〉重々しい, 深刻な
- 18 (子を)身ごもった((with ...))
- 19 〈工業が〉(鉄鋼・石炭などの)原材料を生産する, 重…
- 20 《化》重…
- 21 《劇》〈役柄が〉まじめな;悲劇的な;悪役の, 敵(かたき)役の
- 22 〈人が〉流行に通じた;洗練された;インテリである
- 23 〈性行為などが〉濃厚な, 激しい;((米俗))みだらな
- 24 ((米略式))金持ちの, 有力な
- 25 ((米俗))すばらしい, すぐれた

参考文献

- 安藤貞夫(1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店。
- 李御寧(1982) 『「縮み」志向の日本人』学生社。
- 石井隆之(2009) 「言語と経済性のメタ原理に関する一考察」『生駒経済論叢』第7巻第1号、近畿大学経済学部。
- 剣持武彦(1978) 『「間」の日本文化』講談社。
- 剣持武彦(1984) 『「にじみ」の日本文化』PHP 研究所。
- 牧野成一(1996) 『ウチとソトの言語文化学』アルク。
- 永田久(1989) 『年中行事を科学する』日本経済新聞社。
- 大築立志(1989) 『手の日本人、足の西欧人』徳間書店。

大峽儷三 (1998) 『陰陽で読み解く日本のしきたり』 PHP 研究所。

芝垣哲夫(1989) 『日本文化のエトス』 創元社。

清水馨八郎(1984) 『手の文化と足の文化』 日本工業新聞社。

朱冠中(1988) 『「切り志向」の日本人』 NESCO 文藝春秋。

山田雄一(1985) 『稟議と根回し』 講談社。

補遺

論考を終えても、日本文化においては、重なり志向は色々と見つかるものである。鳥居を重ねる伏見稲荷、言葉遊びに見える日本人の重ね好き[(1)と(2)参照]、重ね合わせるのが基本の折りたたみ式携帯の普及など、枚挙にいとまがない。

- (1) a. 一二三四五六(ひふみよごろく)や百百百百(とどももひゃく) [実際にあった人名]
- b. 子子子子子子子子子子子子子子(ねこのここねこししのここじし)
- c. シカイシカイシカイ(歯科医師会司会)

(2) 高知県の『地球 33 番地』

高知県に東経 133 度 33 分 33 秒、北緯 33 度 33 分 33 秒の地点が存在し、毎年 3 月 3 日に記念式典が行われ、2009 年は午前 10 時より 33 分間清掃し、10 時 33 分より記念式典が開始され、式典後、33 種類の具を入れた 33 鍋を振る舞った。

また、古代日本人の世界観では、上に高天原、下に根の国(=死者の国)、水平方向のかなたに常世(=神の国)が存在し、上下の世界と左右の世界が重なる交点に、中津国という日本が存在する。これも重なり志向と言えそうである。

更に、日本文化における重要なコンセプトとして必ず話題に上る「わび」や「さび」も、それぞれ、次のような一見マイナスイメージのコア概念に、プラスイメージの原理を重ねてできあがるコンセプトと言える。わび・さびも重なり志向と言えるのである。

- (3) a. わび=poverty (わびしさ) +refinement (洗練)
- b. さび=rusticity (さびしさ) +refinement (洗練)

重なり志向性が強いのが日本の伝統であるが、最近では、伝統文化の衰退と共に、この志向性が薄れる傾向があるのではないかとと思われる。

重なり志向は日本を救うと思う。例えば、食事の取り方が fast-food 産業の発達と共に、速くなったが、ゆっくりと何度も重ねて噛むことが健康につながるし、草食男子が増えたという状況が取沙汰されるが、男女の正しい出会いとしての男女の重なりは少子高齢化社会の問題解消につながる。

また、七福神の絵に見る神の重なりは、多神教を暗示し、宗教的寛容性を感じさせる。これは世界の平和につながる可能性を秘めている。

今こそ、「重なり志向」の重要性に目を向け、重なり志向を重ねていくことが求められているのではないかと私は考える。